

「カンボジア、トンガ、メキシコ、エルサルバドル」 土木技術者人生の折り返し地点に 海外工事から学ぶこと

佐藤 秀樹

東亜建設工業(株) 国際事業本部 工事部 土木積算課 課長

過去約10年の振り返り

土木学会誌2013年4月号にて、海外工事の場を目指す若手技術者へ」と題し、メキシコ・LNGターミナル工事を題材に記事を執筆した。前回の投稿から現在に至るまでの自身の歩みを振り返り、'Let's go abroad'を唱えたいと思う。

土木屋としての面白さに気付く

前回の題材としたメキシコのLNG工事では、私自身の経験、設計知識や語学力の無さを痛感した。その反省から、施工だけでなく設計も含めた知識を自分の言葉で発注者に説明できるエンジニアになりたいと、

設計部への異動を切望し、30歳頃から4年ほど携わることになった。

そこでは海外工事を対象とした入札、仮設物の設計、施工段階の設計に携わった。日本の設計基準を用いた実務から始め、その後、英国や米国の基準にも触れる機会があったことは、技術者としての知見が広がり、幸運であった。

設計に携わるようになり、上司に「競争入札においては、仕様を満たしながら、かつ競争力のある設計でなければいけない」との指導を受け、技術力以外の経済性などにも意識が向き出した。海外工事では、日本の規格では入手できない材料や日本の技術をそのまま利用できないことも多々あり、現地の状況に応じて工夫する必要があつて苦労をしたが、現

場での対応力の向上につながり良い経験となった。

そろそろ海外工事に戻りたいという気持ちがあつた。海外部署の積算課に配属され、海外工事の入札を担当することになった。土木屋として約10年が経過した35歳に差し掛かった時である。日本の様な明確な積算基準がない海外工事で、競争力のある積算を行い、落札して、さらに利益を上げることの難しさを、身をもって体感した。一方で、現場・設計・積算を一通り経験したことで、技術者として必要な経験と知識がある程度結び付いた瞬間でもあった。特に海外の大規模工事全体を担当していたことも自身の意識改革につながった。急にいろいろなることが点から線につながっ

て物事が見えるようになったと言っても過言ではない。それまでは、どこか工事の一部の「やらされ感」を持ちながら仕事をしていた時もあったが、仕事が面白いな、と思えるようになってきたのがこの頃である。

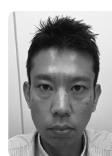
カンボジアでの都市土木とマネジメント業務

2018年末にODAの無償資金協力である、プノンペンの洪水対策工事(管路敷設工事)を入札から担当し、契約にいたったことで、自身にとっても初のカンボジアにおける工事かつ都市土木に携わる事となった。38歳での事である。

工事は約3年間にわたり、交通量の激しい供用中の道路の下に約13km、平均直径1・5mの下水管を

SATO Hideki

2005年4月東亜建設工業入社。2008年に中南米地域にて初の海外工事を経験。その後、海外設計部、海外積算課、海外現場などを経て現職。



昼夜で敷設する作業が主であった。意気込んで臨んだが、自身が設定した施工計画などに見誤りが多々あることが現場立ち上げをする中で次々と判明した。積算時の違算という重圧が襲い掛かってくる日々が続き、幾度となく心が折れそうになったことが、今でも走馬灯のように蘇ってくる。会社人生の中でも最大級のピンチであった。それを救ってくれたのは、上司や同僚のエンジニアであった。一人で抱え込むタイプの人間であった私だが、自分一人ではどうしようもないという現実により、大規模海外現場運営の肝となる「人に任せられる組織作り」の重要性に気付かされた瞬間であった。

現場は市内25km内に最大で26カ所ほど点在しており、協力会社を含む約80名のエンジニアをどう束ねることができかが課題であったが、このような状況が逆に自分を救ってくれたと思っている。マネージャーだけが情報を抱え込まず、全エンジニアに各現場の状況を共有すべく、各自のスマートフォンにグループチャットツールを入れてもらい、点在する各現場の進捗情報を写真やテ

キストで投稿して随時全員が閲覧できるようにした。情報を共有することで、おのずと各自がコミュニケーションを図り、資材や人員を現場間で有効に活用するなど、自主的に動いてくれるようになった。今でこそコロナ禍を経てこのような取り組みが進んでいるが、当時はまだ一般的ではなかった。チーム一丸となり、コロナ禍による困難もあったが契約工期内に完工したのもこの仕組みのおかげであった。20代後半のメキシコ時代は自分が先頭に立って、現場がむしやりに動いていたが、カンボジアでの仕事を振り返ると、毎日80名のエンジニアの顔を見て回り、現場の問題点やおのの公私にわたる相談に乗っていたことが取り組んだ業務の8割ぐらいだった。特に海外事業では現地のエンジニアが自国をより良くするために勤勉に働き、日本流のやり方を学ぼうとしてくれる。将来の国を背負う若いエンジニアと一緒に仕事をさせてもらい、お互いに信頼を築き、大きな気持ちで任せる事ができるようになったのが、この工事での学びであり、海外工事のマネジメントの醍醐味だと改め

て気付かされた。

現在の状況と今後の展望

40歳となった3年ほど前から工事部の土木積算課長として、ODA無償・有償、民間案件の入札や見積作業を若手からシニア職員を交えて対応をしている。特にここ数年で、10カ国以上の外国人職員を雇用し一緒に仕事をできるようになった。東京本社私の席から見渡しても課員の半分以上は若手の外国人職員であり、海外出張も彼らと共にすることが増えた。働き方改革の一翼も外国人職員が担っており、われわれ日本人職員の中堅からシニア世代の意識改革にも良い影響を与えてもらっている。このような状況から、建設業の就業年齢層のボトルネックとなった40代である私の当面の目標は、外国人を含む若手社員と50代以上のシニア社員を融合し、各自が100%以上の力を出し切れる組織を構築することであると感じている。

Let's go abroad

35歳で結婚をして、今は幼稚園の娘と保育園の息子にも恵まれた。妻も正社員で仕事をしているが、妻任せの部分が多く反省するところである。家族との生活と海外でのキャリアとの両立の難しさに悩む事も正直多くなった。子どもが急に熱を出せば、どちらが看病のために早退や休むかで悩ましい事もある。昔の頃のように、自分だけを考えて軽快に動けた時代を思うと、今の状況にもどかしさを感じつつ、*Let's go abroad* を唱えるにはどうすればいいのか？

今の瞬間が人生で一番若い、という言葉を最近耳にし、確かにそうだと思う。若く好奇心旺盛な時期に海外工事にチャレンジしてみる事も、40代から70代で子育てや親の介護が落ち着いた方、はたまた人生の転換期がふと訪れた時に海外工事に挑戦・再び足を踏み入れる事も、同じように今この時にしかできないことだと感じる。やらずして後悔するよりやって後悔したほうが良い、*Let's go abroad* はそんな方の背中を押す言葉として唱えたい。

(担当編集委員：茂木哲一)